

115. 脂肪肝の診断における肝シンチグラフ イーの意義

千葉大学 放射線科

国安 芳夫 内山 晓 川名 正直
館野 之男

第1内科

五十嵐正彦 奥田 邦雄

〔目的〕 脂肪肝の診断は肝生検により脂肪の沈着を認めるのが確実な方法であるが、より簡便な方法として、スキャン上の特徴を抽出することにより肝スキャンによる脂肪肝の診断、さらに慢性の肝機能障害例での肝炎と脂肪肝の鑑別診断の可能性について検討する。さらに脂肪肝の病因によるスキャン上の所見の差や肝機能検査成績等に関しても検討する。

〔方法〕 肝生検で標本の30%以上におよぶ脂肪沈着を示した35例を対照として肝機能検査、糖負荷試験、肝シンチグラムの所見を検討し、飲酒歴、肥満の有無、糖尿病など基礎疾患・合併症の検討を行い組織所見と対比した。

〔成績〕 シンチグラム上脂肪肝の形態は一般に正常に近く、変形の少なくないものが大部分を占め、全体に腫大した像を呈するものが多い。脾および骨髄へのuptakeも軽度または殆んど認められないものが多い。組織像では脂肪が標本の70%以上を占めるもの12例、50%前後のもの11例、30~50%が12例で、病因としては糖尿病、肥満、アルコール性と考えられるもの等の他はっきりした原因の不明のものもあったが、これら合併症・病因別にみた肝の形態変化および腫大像や脾・骨髄のuptake等には余りはっきりした差は認められなかった。

〔結論〕 スキャン上正常の形で全体的腫大像を呈し、脾・骨髄への摂取が比較的少なくないものが多いことから、かなりの程度まで脂肪肝のスキャンによる診断が可能であり、当然のことながら変形の強い慢性肝炎との鑑別診断には有用な手段といえる。

116. 慢性アルコール性肝障害患者の肝シンチグラム像について

熊本大学 第3内科

中川 昌壮

近年、アルコール中毒患者の増加とともに、アルコール性肝障害患者の増加が目立っている。アルコール性脂肪肝の時期は症状が乏しくて受診するものが少ないため、この時期の肝シンチグラム像についての経験は少ないが、Sachs, B.A.ら(1974)はhyperlipoproteinemiaの患者にて肝シンチグラムが異常を示し易く、とくに中性脂肪の高値を示す症例において、異常像発生頻度は高率であることを指摘しているごとく、アルコール歴保有者では肝シンチグラムに異常を示す可能性が考えられる。

演者は、最近2年余の期間に経験した慢性アルコール大酒家で、アルコール性肝炎ないしは肝硬変症としての臨床症状、血液化学的所見を示した症例について肝シンチグラム像の検討をおこなった。なかでも、溶血性黄疸を合併し、Zieve's syndromeを疑った症例においては、肝濁音界は正常に保たれておるにもかかわらず、¹⁹⁸Au-colloidの肝へのとりこみはきわめて悪く、ほとんど肝像ならびにその輪郭の指摘が困難であった。一方、脾像の出現は明瞭かつ大きく熊本大学第3内科方式のsplenic scoreの算定基準に従えば6となり、慢性肝炎群の多くは2、肝炎後肝硬変症群の多くのものが3~4をとるのに比べて明らかに高値をとった。その他のアルコール性慢性肝障害の症例でも、一般的に肝へのとりこみは悪く、不整で、いわゆるpatch, patternを示し易く、それに対して、脾像へのとりこみは有意に高く、かつ、大きく、上述のsplenic scoreは多くの症例で5~6を示した。DeLand & WagnerのAtlasにも症例提示があるが、今後ますます経験する機会が増加すると思われる慢性アルコール中毒患者における肝障害の診断に有用と考えられる。